土兵二名隨行し、沿途の護衛及宿泊萬端の便宜を圖れり。路は同十時の頃迄西南を指し、其れより西行印度河の右岸を下る。北は崑崙山脈、南はヒマラヤ山脈にして、共に高峰峻嶺を競ひ、中腹以上は總て白雪皚々たり。印度河谷は、此邊に於て幅約二千米突内外のみ、同五十分小坂頂に上れば、一望大起伏を成す臺地にして二三の小部落其の窪地に點在し、地質は磽确、花崗岩大部を占む。午後三時、行程十四哩、チモーに到る。此處は人家約六十戸「ダック、バンガロ」及驛馬の設け有り。

レー、よりスリナガルに到る、各驛には「ダック、バンガロウ」即ち官設の客舍あり。其の構造は土地部落の大小に因りて、差等あるも、通常木造の洋屋にて、二三の客室を設け、室内には椅子、卓子、寢臺等の設備、其他浴室を有す。別に何等裝飾の美なきが、素より土人の陋屋に比すべくもあらず。室の内外は、看房人に依て清潔に保持せられ、旅客の便宜頗る大なり。

道に英人の經營

道に英人の經營施設に係る程ありて、轉た感服の外なし。食事は凡て自炊とし、一泊二留比内外を看房に與ふれば足る。

十六日午前七時發、一部落を過ぎ、同八時十五分、小坂に達す。坂上又臺地を成すこと昨日と同じく、同十一時三十分、稍々急なる坂を下り盡せばシャスボーとす、次